

The Winter's Tale におけるクラウンとその特徴

西野義彰

I

Hamlet をはじめ偉大な悲劇をたくさん創作した後、Shakespeare はそれまでの作品とは雰囲気が大きく異なるロマンス劇をいくつか書いている。それらの中で *The Tempest* が最も知られているが、次に続くのが *The Winter's Tale* (1611 頃) といえるかもしれない。この劇に羊飼いの息子として滑稽なクラウンが登場するが、*Othello* など悲劇のクラウンと比較すると、彼の台詞の量ははるかに多く、それだけ活躍の場が与えられているといえる。クラウンの考察に入る前に、先ずこの作品の主な特徴について押さえておきたい。

Shakespeare がこの劇を書くにあたって依拠した最も重要な文献は、Robert Greene の散文ロマンス *Pandosto* (1588 出版) であり、作者は筋のほとんどにおいて密接に従ったといわれている。その原典をベースとしながら、作者は王妃 Hermione (原典では王妃は悲しみのあまり死亡し、決して生き返る事はない) を結末において劇的に復活させるなど、いろいろ改変を加えることで、独特の不思議な作品を完成させた。作者がこの劇に 'The Winter's Tale' という題を付けたことは、それが劇世界の特徴や雰囲気を暗示するという意味で注目に値する。Marjorie Garber によると、そのタイトルは文字通りの意味であると同時に諺的な意味も持っていて、その表現が意味するものは「おとぎ話」のような何か、又は、主に女性、子供や老人のための楽しい娯楽であるということである。¹ 別の言い方をすると、'a winter's tale' 又は同じような表現は、冬の夕べをのんびりと過ごすのに打って付けのつまらない昔話ということで、'tale' という言葉が当時も真面目に受け取ることができない何かを意味し得た。² この劇の語り手は誰かということとはさておき、王妃たちに何か話を聞かせてほしいと頼まれた王子の Mamillius は、"A sad tale's best for winter: I have one/Of sprites and goblins." (2.1.25-26)³ と言って、子供らしい反応をしている。冬とい

う季節には悲しい物語がもっとも相応しいということであるが、皮肉にも'sad tale'という言葉は、シシリアの王家で生じることになる王子の死や家族離散の不幸な出来事を暗示している。悲劇で始まり終幕でのシシリア王と娘の劇的な再会、16年前に死んだと思われた王妃の奇跡的な復活という喜劇的な結末までの全体を見ると、この劇は現実にはありそうもない夢物語というべき世界である。

物語はシシリアを舞台として始まる。そこでは深い友情と絆で結ばれたボヘミア王が9ヶ月もの長期にわたり滞在しており、ついに帰国を決意する。シシリア王が思いとどまるよう説得しても決意を変えなかったが、王妃に説得されると簡単に承諾するのを見て、シシリア王はたちまち激しい嫉妬を抱く。その激しさは、Iagoの仕業によりいとしい妻の殺害へと突き進んだOthelloのそれを思わせるが、後者の場合は段階を踏んで進行するのに対して、シシリア王の場合はあまりにも唐突で急激に進行する点で相違がある。理性による抑制が効かなくなった王にとって、心に浮かぶ妄想が現実となり、長年の友情や妻子への家族愛は危険な殺意に取って代わられる。根拠なき愚かな疑念とアポロの神託さへ否定する傲慢さによって、Leontesは大切な家族（王妃、王子、実の娘Perdita）、忠実な臣下と彼らの信頼、友人さえも失い絶望の淵に突き落とされる。彼の嫉妬はあまりに唐突で不自然だという見解があるが、彼の嫉妬が劇そのものを始動させる点で極めて重要な機能を持っている。J. H. P. PaffordはLeontesの嫉妬について言及し、Shakespeareは突然の出来事に満ちており、2時間前後で終わる芝居であれば物事がすばやく起きなければならず、エリザベス朝の人々は芝居における突然性に慣れていと述べている。⁴ そうであるならば、王の嫉妬について当時の観客はほとんど違和感なく受け止めたことになる。3幕2場の終わりまで、シシリアを舞台に展開する物語は悲劇の構造を持ち、陰鬱な冬の季節にふさわしい'sad tale'になっている。

この劇の特徴の一つは、時間（Time）が4幕1場でコーラス役として登場し、その強力な力で観客をシシリアから16年後のボヘミアに一挙に連れて行くことである。そこでは羊飼いたちに奇跡的に拾われ、大人として成熟した非常に上品で美しいPerditaと、ボヘミアの王子Florizelの純粋な恋を中心に、羊毛刈り祭（sheep-shearing feast）が全体を包む、明るくて陽気な世界が展開する。シシリアとは全く異なり、様々な草花、田舎娘たちを喜ばせるいかがわしいバラッド、祭りに付き物の様々な小間物、村人たちのにぎやかな踊りなどが

陽気な祝祭空間を創造し、それが永遠に続くかのような印象を与える。直前までのシシリアが暗く厳しい冬の季節であるとすれば、ボヘミアは春と夏が到来したかのような生氣あふれる季節である。この空間に不可欠の存在が、道徳には全く無縁の *Autolycus* である。彼はならず者、各地を渡り歩く行商人、ペテン師であり、4幕3場で自分を「こそ泥」(a snapper-up of unconsidered trifles) であると告白している。しかし、彼が犯す詐欺や盗みなどの行為はボヘミアの人々に大きな被害を与えることはない。彼が歌う陽気な歌(バラッド)は草花や動物、性的で卑猥なイメージ(アリュージョン)を含んでいて、彼自身は野性的なエネルギーに満ち、社会に活力などをもたらすのみならず、この劇を喜劇的結末に導くために彼なりの役割を果たしている。

シシリアとは異なり、ボヘミアでは宮廷もしくは政治を行う確かな体制が見えない。ほとんどは田舎の農夫たちの陽気で素朴な会話が中心で、王たちも変装して牧歌的世界の祭りに参加するというもので、シシリアが宮廷、都会、文明、暗い冬、非情などと結びつくとすれば、ボヘミアは田舎、牧歌的な自然、純朴、人間的な暖かさ、活力に満ちた季節、楽しいカーニヴァルなどを強く感じさせる。後者ではトラブルがあっても深刻な事態には至らず、人々は単純で愚かしいが心から人生を楽しんでいる。そんな中、王の許可を得ずに王子が羊飼いの娘 *Perdita* との結婚を宣言することで王の怒りを買うが、*Camillo* の適切な助言により二人はシシリアに向かう。再び後継のいないシシリアが舞台となり、この悲喜劇は結末に向けて急展開する。

16年もの間懺悔と祈りの日々を送ってきたシシリア王により、ボヘミア王子らは春の訪れとして歓迎を受ける。後を追ってきたボヘミア王の告発で一時的に危うい状況になるが、その後羊飼いの親子の説明により信じがたい事実が判明し、シシリア王と実の娘が劇的な再会を果たす。それはまさに「昔話のような」(so like an old tale, 5.2.28) 出来事である。この不思議な物語を完成させるために、最後の大きな奇跡、つまり、彫像としての王妃 *Hermione* が生きた人間として王たちの前で復活するという奇跡が *Paulina* により用意されている。王妃の死については劇中何度も強調されていて、復活が奇跡になるためには王妃の死という事実が前提になる。劇中人物のみならず観客のすべてが王妃の死を確信している。従って、5幕3場で音楽が奏される中、*Paulina* の呼びかけで王妃がゆっくり台座を下りる時、言葉を絶する奇跡が起きるのである。

さて、この劇の主要なテーマ⁵について見ておきたい。この劇は *Leontes* の

突然の嫉妬により平和で穏やかな雰囲気破壊され、王家の分裂と離散、国自体の存続の危機へと向かう点で、嫉妬（特に男性の内部で激しく作用する破壊的な嫉妬）は劇を始動させる原動力であり、大きなテーマの一つであるといえる。その嫉妬が Mamillius 王子や臣下の Antigonus たちを死に至らしめ、生まれたばかりの娘を死の危険にさらし、王妃にも結末における奇跡的な復活まで日陰の残酷な人生を強いることになる。他のテーマとして、不幸な出来事で失われた者はいるが、結末における奇跡により離散していた家族が再会し、社会の絆が再構築されるという点で、罪と赦し、慈悲と和解、家族の分裂、離散、再会というテーマ、家族や社会を結びつける絆の喪失と回復のテーマが大きく扱われていることは確かである。（作者は社会や家族を結びつける絆に強い関心を持っており、この劇は絆の断絶で始まり、それらの回復で終わる⁶ ということができる。）これらと関連して、失われたものが不思議な形で発見される点で、喪失と発見も主要なテーマと考えられる。また、この劇では時間の経過が強く意識され、4幕では擬人化された時間がコーラスとして登場し、16年のギャップを一挙に埋めて観客をボヘミアに連れて行く。時間はシシリアにおいて直線的に、ボヘミアにおいて循環的に流れているように思われるが、時間のテーマは上に挙げた全てのテーマと深く結びついている。時間の経過と関連して、成長と衰退、死と再生のテーマが指摘できる。これらのテーマは、誕生から死までの人生のサイクルと春から冬への季節のサイクルに強く結びついて展開していて、Northrop Frye の言い方をすると、1年の冬や夏をとおし、人間の世代の老齢や若さを通して回転する自然のサイクルがこの劇のイメージの中心にある。⁷

この劇は明らかに夢物語のような非現実的な筋で成り立っている。作者は3一致の法則にも無関心であり、意図的に「本当らしさ」の追求を放棄している。⁸しかし、この劇も優れた役者によって舞台の上でひとたび演じられると、そこに現実的で迫力のある世界が出現することになる。Leontes の異常で激しい嫉妬、Hermione の無実を訴える懸命の弁明と忍耐の化身というべき気高い姿、王の愚かな誤解を命をかけて非難する Paulina、ボヘミアでの Perdita と王子の純粋で情熱的な恋、観客がよく知っている羊毛刈り祭⁹で心から祝祭を楽しむ生き生きとした庶民の姿などを見ると、観客としては舞台上で展開する芝居が虚構であると知りつつ、いつの間にかその中に引き込まれる。悲劇時代のあとに作者が夢とも現実ともいえるような悲喜劇を書いたとき、この世は夢と現実が

不可分に混ざり合った不思議な世界で、実はそれがこの世の実体であると考えていたのではないか。この劇のすぐ後に創作された *The Tempest* の4幕1場で、主人公の Prospero が「我々は夢のようなものでできている、そして我々の短い人生は眠りで終わるのだ」と語っているが、同じような人生観がこの劇にも流れているように思われる。

II

羊飼いとその息子クラウンが登場するのは、シシリア王の娘がボヘミアの海岸に捨てられ、使命を果たした Antigonus が熊に襲われて退場した直後である。かってないほどのすさまじい嵐の中、若者の愚行を非難しながら行方不明になった自分の羊を探しにきた羊飼いが、偶然いわくありげな赤子を発見する。そのまま放置すれば死の危険があるが、彼は絶妙なタイミングで登場しその赤子を救う。宮中の女官が絡んだ男女の色恋沙汰を想像しているところへ、息子のクラウンがやってくる。彼らは、劇が悲劇から喜劇へと変わるまさに転回点に登場するのである。Skura Meredith Anne は、ここでのクラウン登場はほとんど純粹に祝福であり、悲劇におけるようにクラウンは危機のすぐ後に登場すると述べている。¹⁰ クラウンによる激しい嵐、海の藻屑と消えた船乗りたち、熊に襲われた Antigonus の悲惨な光景などの描写には、動揺や感傷的なものは何もなく、目撃したことを自分の言葉で淡々と説明する点が特徴的である。彼の“the men are not yet cold under water, nor the bear half dined ¹¹ on the gentleman: he’s at it now.”(3.3.104-5) という言葉は、人間的な情の欠如や冷淡さを感じさせるが、すぐ後で熊の生態に言及し紳士の残骸を葬ることを考えているところから、彼は決して無情な人物ではなく、自然の姿をそこで暮らす非力な者がありのままに受け入れ、自分の言葉で表現しているに過ぎない。Marjorie Garber はクラウンによる二つの悲劇の報告について触れ、ボヘミアやクラウンたちの単純で哀れみ深いトーンが、それらを直接の悲劇ではなく遠く離れた場所のロマンス、沈没や喪失に思わせると論じている。¹² それを聞いて羊飼いは深く同情するが、気を取り直して次のように言う。

Now bless thyself: thou met’st with things dying, I with things new-born. (112-13)

息子は死にゆく者に出会ったが、彼は生まれたばかりの新しい命に出会った。彼はこの幸運を心から感謝し、今後の善行を誓いながら息子と帰途につく。シシリア王の娘は不思議な運命により、遠く離れた国の善良な親子に拾われるのである。

クラウンたちが再び登場するのは16年後のボヘミアで、Perditaは羊飼いの娘として美しい女性に成熟しており、ボヘミア全体が羊毛刈り祭の準備で活気づいている。クラウンは祭りに必要な物の買い出しに行く途中、こそ泥でならず者のAutolycusにねらわれる。追いはぎに襲われてひどい目にあったという相手の説明に、お人好しのクラウンは何の疑念も抱かず、親切に介抱するとき見事に財布を取られる。この場面は観客にとって一瞬ながら、クラウンの阿呆ぶりとスリルを楽しむ場面となる。犯人の名前を聞いてクラウンは憤りを覚えているので、Autolycusについて多少は噂で知っているようである。結局、クラウンは財布のことなど全く気づくことなく立ち去る。

羊飼いの小屋では、祭りの女王Perditaと彼女に恋をしているFlorizel、最近の王子の行動を懸念し変装して様子を見に来た王のPolixenes、家臣のCamilloをはじめ多くの人が集っていて、音楽や羊飼いたちのにぎやかな踊りが加わり、祭りが本格的になる(4幕4場)。そこへ行商人に変装したAutolycusが、田舎娘が喜びそうな様々な小間物やバラッドなどをもってやってくる。クラウンはMopsaに恋をしているが、娘たちがあけすけに色恋ざたを話すのを聞いてたしなめることで、彼は多少の分別を見せる。Mopsaがプレゼントの約束について触れると、クラウンは犯人がすぐそばにいる事も知らず、買い出しの途中で財布を取られたことを告白する。不思議なのは、この出来事がクラウンや周囲の者にほとんど問題になっていないことである。彼らは様々な小間物に関心を寄せ、特にバラッドに関してはその内容がいかにてたらめであっても、Autolycusの滑稽な説明にすぐ納得してしまう。ここでは、クラウンをはじめボヘミアの人々の純朴で疑うことを知らない、愚かなほどの素直さが際だっている。

陽気な祭りの雰囲気は、王の許可なく王子がPerditaとの結婚を宣言し、王が正体を現して息子たちに激怒することで突然終わりを告げる。しかし、恋人に対する王子の愛は純粋で揺るぎなく、勘当されても意志を貫くことを知ったCamilloは、シシリアに行き王に面会することを勧める。3人が相談している

ところに Autolycus が意気揚々と登場する。彼は“Ha, ha! what a fool Honesty is! and Trust, his sworn brother, a very simple gentleman!”(4.4.596-97) と正直者を馬鹿にしながら、田舎者相手に全ての品物を売りさばき、大部分の客の財布も抜き取ったことを自慢する。彼は一瞬独り言を立ち聞きされたと思いあわてるが、王子と服の交換を要求されると本能的に事の重要性を察知し、彼らが退場すると今こそ「不正直者」が出世する世の中だと確信する。

行商人の粗末な姿から立派な服装に変身した Autolycus の前に、王の怒りを買った羊飼いの親子がせっぱ詰まった様子で登場する。クラウンは父親に、妹が「取り替え子」(changeling) であり、何ら彼らの身内ではないことを王に告白すべきだと提案する。

She being none of your flesh and blood, your flesh and blood has not offended the king ; and so your flesh and blood is not to be punished by him. Show those things you found about her...(693-96)

これに対して羊飼いは、「私を王の義理の兄弟」にしようとは、王子こそとんでもないやつだと答える。上のクラウンの台詞には ‘your flesh and blood’ が3回も繰り返され、そこに強調の意図があると思われるが、観客はクラウンの単純な思考と言葉遣いに滑稽さやおかしみを感じざるを得ない。二人の会話を聞いていた Autolycus が宮廷人になりすまして高飛車な態度で話しかけると、当時の演劇では約束事として変装が見破られることはないので、今回もクラウンは別人として丁重に應對している。次の Autolycus の台詞は宮廷人風の言葉遣いとともに高圧的であるが、機知とユーモアに満ちて面白いものになっている。

Whether it like me or no, I am a courtier. Seest thou not the air of the court in these enfoldings? hath not my gait in it the measure of the court? receives not thy nose court-odour from me? ... I am courtier *cap-a-pe* ; and one that will either push on or pluck back thy business there : (4.4.730-38)

注目に値するのは、この後 Autolycus が羊飼いの親子と知りながら気づかな

いふりをして、今回の騒動の当事者に対し王は考え得る限りの極刑で臨むことになる、具体的に恐ろしい光景を描写しながら小心者の恐怖心をあおる場面である(773-82, 785-95)。そこには一瞬ではあるが、*Henry IV Part 1 & 2* に登場する、あの痛快で巨大な道化 Sir John Falstaff を思わせるような機知とユーモアの輝きが見られる。怖じ気づいたクラウンは、彼にワイロを渡してでも便宜を図ってもらうことを提案する。

He seems to be of great authority : close with him, give him gold ;
and though authority be a stubborn bear, yet he is oft led by the nose
with gold : show the inside of your purse to the outside of his hand,
and no more ado. (802-6)

クラウンは金貨やキジなどのワイロが世間ではものを言うことを知っていて、権威が頑固な熊でも金貨を見せればしばしば思うままにできるので、とりあえず財布の中身をすべて渡してはどうかと説得する。クラウンたちにとって残酷な極刑を逃れるためには、至急王に面会し真実を語るしかなく、宮廷人姿の Autolycus が彼らを窮地から救ってくれる有力な人物に見えるのは自然である。彼らがワイロの半分を渡して退場した後、Autolycus は「正直者になろうとしても運命の女神が許してくれない」と言って、うまく行けばこの件で出世できると期待しながら退場する。

第5幕で舞台は再びシリアに移り、Florizel と Perdita、その後を追ってきたポヘミア王一行、羊飼親子など重大な問題の解決に不可欠の人物がすべてそろろう。5幕2場で脇役の紳士によって、羊飼いによる真相の説明、王の娘の発見、アポロの神託の実現、王たちの言葉を絶する驚きと感動が散文で間接的に語られる。Autolycus は羊飼いと息子をシリアに行かせる点で貢献をしているが、上述の感動的な場面に参加することは許されない。本人もその理由は理解していて、自分の過去の生き様を後悔している。彼とは対照的に、その場面に参加し、いきなり国王の親戚かつ紳士の身分に出世したばかりの羊飼親子が登場すると、3人間で滑稽な会話が展開する。クラウンは Autolycus に、

You are well met, sir. ... See you these clothes? say you see them not
and think me still no gentleman born : you were best say these robes

are not gentleman born : (5.2.129-33)

と、誇らしげに紳士としての威厳をなんとか示そうと努めながら話しかける。面白ことに、紳士になったのはわずか4時間前のことであるが、クラウンは父親よりも自分が先に紳士になったことを強調する。

... but I was a gentleman born before my father ; for the king's son took me by the hand, and called me brother ; and then the two kings called my father brother ; and then the prince, my brother, and the princess, my sister, called my father father ; and so we wept ; and there was the first gentleman-like tears that ever we shed.(139-45)

ここには些細なことにこだわる、クラウンの子供のような単純さ、憎めないかわいらしさが見られる。これまでポヘミアの牧歌的な世界で、宮廷人の洗練された世界とは無縁の生活をし、恐らく王侯貴族と言葉を交わすことなどなかった彼らは、今や国王や王子から‘brother’, ‘father’と呼ばれる身分になった。あまりに急激で信じがたい運命の変化に彼らは当惑し、夢のような出来事を懸命に理解しようとしている。授かったばかりの紳士という身分と栄誉は、Duncan 王殺害の後王位についた Macbeth と同様、真新しい衣服のように彼らにしっくり行っていない。すぐ後でクラウンが今の状況を「すばらしい」(prosperous) のつもりで ‘preposterous’¹³ (人の意に逆らう、ひねくれた) と行って、言葉の誤用を犯しており、難しいことを言おうとすると言葉がついていかない。クラウンには高尚なブランクヴァースは所詮無理であり、平凡で粗野な散文が最も似合っている。上の引用で見せるクラウンたちの泣き笑い、特に彼らが流した「最初の紳士らしい涙」(the first gentleman-like tears) という言葉は、観客の笑いを必ず誘うはずである。ポヘミアではさすがの思いで Autolycus にワイロを渡したクラウンたちは、今や紳士になって口達者な彼を黙らせ、敬語さえ使わせるまでに出世した。クラウンは彼に“Come, follow us : we'll be thy good masters.”(174-75) と言って得意げに退場する。しかし、皮肉なことに、この劇の最後の場面、王たちを前に Paulina が王妃を復活させるクライマックスでは、Autolycus は当然としても、羊飼いの親子も参加していない。

この劇のクラウンについて論じるとき、Autolycus にも言及せざるをえない。

それだけ後者は喜劇的な側面において重要な人物で、クラウンたちと何度も接点を持っている。彼はならず者、こそ泥であるが、他の人々を不幸へと追いやる真の悪党ではない。彼が犯すささいな窃盗や詐欺的行為は、ポヘミアではほとんど無害で影響を与えない。彼がその祝祭空間にもたらず陽気な精神や歌などは、祭りの雰囲気の大いに高めていて、彼はその世界に不可欠の存在になっている。彼はローマ神話につながる要素（窃盗は Mercury、歌の才能は Apollo の影響を受け¹⁴、自在にバラッドなどを創作する詩人的な能力を持っている）、春の先駆者、自然界の奔放で逞しい生命力、青春のエネルギー、時間の枠を自由に移動し時間を超越するような要素を持つとともに、劇中何度も変装によって姿を変えており、クラウンたちよりはるかに複雑でとらえ所のない存在である。4幕の終わりで、ポヘミアの王子たちがシシリアに逃亡する時、衣服を交換するなど協力することで、劇後半の喜劇的雰囲気に重要な貢献をしている。ただし、筋との関わりという点では、彼は大きな影響を与えていない。

Autolycus とは対照的に、クラウンは平板でスケールの小さい人物であるが、父親とともにこの劇では貴重な存在となっている。悲劇におけるクラウン、例えば、*Hamlet* の墓掘り、*Othello* のクラウン、*Macbeth* の門番、*Antony and Cleopatra* のクラウンなどを見ると、それぞれ異なる役割を持って登場するが、彼らの出番は大きく制限され極めて少ない。主人公が己の性格と運命に翻弄されて悲劇的な結末に突き進む重苦しい世界では、クラウンがいかに機知や当意即妙の才に恵まれていても活躍の場があまりないのは当然といえる。*The Winter's Tale* の場合、前半のシシリアを舞台とする悲劇的な空間ではクラウン登場の余地はほとんどないが、のどかな牧歌的世界ポヘミアと 16 年後のシシリアにおいて、クラウンは喜劇的人物（笑いの対象）として大いに活躍している。彼は宮廷道化 Touchstone のような鋭い機知や利口さもなく、Autolycus に何度も騙される愚かで純朴な人物である。また、財布を取られてもさほど気にせず、いい加減なバラッドでもそのまま受け入れ、立身出世などに全く関心を持たず、自然と動物相手に逞しく生きていて、おおらかで善良な人物である。Perdita が危うい状況で羊飼いの親子に拾われたのは、彼女にとって幸いだったし、そこに神々、特に Apollo の導きがあったかもしれない。クラウンは実の妹として彼女に接してきただろうし、彼女の並はずれた美しさや気品は妖精による「取り替え子」ゆえのものとして理解していたはずである。その後、彼ら親子は予期しない形で劇の主筋に関与することになり、王と娘の劇的な再会に

において不可欠の存在になる。クラウンは *Perdita* の兄として、彼女に関して重大な秘密を知る者として、脇役でありながら劇が喜劇的結末を迎えるまで関わらざるを得ないし、登場の機会も増える。彼は本質的にクラウンであり、知性や感性において洗練されたところはなく、社会の下層を代表する人物である。羊飼いの身分から紳士に出世したところで彼の本質に変わりはなく、*Autolycus* に対する誇らしげな言動は非常に滑稽である。単純、粗野、愚鈍であるが人間的なぬくもりや人間らしさを十分備え、彼らしく生き生きと行動しているがゆえに、また、父親とともに彼が観客に劇を見る別の視点を提供し、劇を楽しむ経験の幅をより広く豊かにするがゆえに、貴重な存在である。*Autolycus* という人物の創造とともに、ロマンス劇におけるクラウンの活用という点で、作者は初期の作品には見られない「見事な技」¹⁵を示しているといえる。

注

- 1 Marjorie Garber, *Shakespeare After All* (Anchor Books, New York, 2004), p.830.
- 2 J. H. P. Pafford (ed.), *The Arden Shakespeare: The Winter's Tale* (Methuen & Co Ltd, 1966), p.liii.
- 3 Ibid. 以後、作品からの引用は全てこの版による。
- 4 Ibid., p.xxvi.
- 5 ロマンス劇と称される、Shakespeare 晩年の作品における共通点や相違点等について論じている文献は多いが、アーデン版テキスト（前出）の Introduction、特に II Relationship in Plot, Structure, and Themes (pp.xliv-1) において作品間の比較分析が簡潔にまとめられていて大変参考になる。
- 6 John Wilders, *New Prefaces to Shakespeare* (Basil Blackwell Ltd, 1988), p.267.
- 7 Kenneth Muir (ed.), *Shakespeare: The Winter's Tale, A Casebook* (The Macmillan Press Ltd, 1968), p.185.
- 8 Harold Bloom (ed.), *Modern Critical Views: William Shakespeare: Comedies & Romances* (Chelsea House Publishers, 1986), p.213.
- 9 François Laroque, *Shakespeare's Festive World* (Translated by Janet Lloyd. Cambridge University Press, 1991), pp.217-22.
- 10 Skura Meredith Anne, *Shakespeare's Clowns* (University Microfilms International, Ann Arbor, Michigan, U.S.A., 1981), p.152.
- 11 Alexander Schmidt は *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (Third Edition, Dover Publications, INC, New York, 1971) において、'dine' という単語を 'to eat the

chief meal of the day' と説明している。M. M. Mahood が言うように、クラウンは Antigonus の運命を熊の視点から見ている (*The Winter's Tale, A Casebook*, op. cit., p.223)。

- 12 Marjorie Garber, *Shakespeare After All*, op. cit., p.839.
- 13 *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*, op. cit., 参照。
- 14 Harold Bloom (ed.), *Modern Critical Interpretations : William Shakespeare's The Winter's Tale* (Chelsea House Publishers, 1987), p.133.
- 15 Bente A. Videbæk, *The Stage Clown in Shakespeare's Theatre* (Greenwood Press, 1996), p.35.